

主 題：栄光の希望を見失わないために4

聖書箇所：ローマ人への手紙 8章26-27節

私たち信仰者に与えられたすばらしい希望、パウロはそのことを私たちに繰り返して教え続けています。30年以上前に私はこの讚美歌を聴き、何度も歌ったことを今でも覚えています。その歌詞を皆さんにご紹介したいと思います。1番「聖書に私のために記されたメッセージがある。私の救い主が記してくださいました。私の心にかかる苦労を取り除くために。そこには、あなたは心を騒がしてはなりません、私は戻って来る、あなたがわたしとともに永遠を過ごすために、と記されている。」、2番「多くの心は傷つき多くの涙が流される。しかしイエスは喜びと平安をもたらし、このメッセージは救いをもたらす。イエスはご自分の愛する者のために再び来られる。雲はいつか裂けて、そしてイエスがその間から現われる。私は主の元に引き上げられるが、あなたは。」、3番「これがクリスチャンの希望である。そして、嵐の中で輝く灯台の光になる。それはその光を放ち続ける、進路を明るくするために。キリストにあった死んだ者が、そして、生き残っている者が天に引き上げられる。何というすばらしい日なのだろう。幸せな勝利の日。」。私たち信仰者に与えられている希望、それは主とともに永遠を過ごすことです。私たちには天国が約束され、私たちは栄光のからだをいただき、この方とともに永遠を過ごすことができる、すばらしい祝福、すばらしい約束を主は私たちに与えてくださいました。

パウロは私たちにそのことを忘れてはいけなと教え続けるのです。確かに、日々の生活の中にあつて、信仰者である私たちは信仰ゆえに様々な困難を経験します。しかし、その中にあつても希望を見失ってはならないと、そのことを教えるために、彼はまず自然界を引き合いに出して話をしました。この自然界、被造物もその時を待望していると。その時がやって来ると、彼らは束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられる、だから、自然界もそのすばらしい時を待っていると。そして、23節からパウロは「いや、待っているのは自然界だけでなく、私たちです！」と、実は、私たちの方がそのすばらしい約束の到来を待っているとしました。ですから、彼は「私たち」ということばを繰り返しつつそのことを強調しました。「私たち自身が…」、私たち自身がこのすばらしい希望の実現を待っていると。パウロはこうして信仰ゆえにいろいろな困難を経験するクリスチャンたちを励まして、一人ひとりがしっかりと永遠の希望を見据えて、それを忍耐を持って待望しながら主に従い続けて行くようにと励ますのです。今日私たちが見ようとしている8章26節からパウロは、実はあなたのために聖霊も力を貸してくれると、そのことを言わんとしています。これを通してパウロ自身、これまでと同じように私たち信仰者をしっかりと励まそうとするのです。私たち信仰者には聖霊なる神が私たちを助けてくださるというすばらしい約束が与えられているのです。

☆聖霊なる神の助けとは？

26-27節を見てください。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。:27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」、パウロはここで私たち信仰者の弱さを語り、そして、備えられているすばらしい神の助けを教えようとしています。私たちがいかに弱いのかを説明した後、そんな弱い私たちにちゃんと神の助けがある、だから、希望を失ってはいけない、希望を見失ってはならないと彼は教えるのです。

A. 信仰者の弱さ 26節

私たち信仰者の弱さとは何でしょう？彼は私たちに二つのことを教えます。一つは信仰の弱さです。もう一つは祈りの弱さです。

1. 信仰の弱さ

まず、26節に「弱い私たちを」とあります。この「弱さ」とは肉体の弱さではありません。信仰の弱さです。どういう意味か？私たち信仰者はみな、神に喜ばれることをしたい、神を喜ばせて行きたいという願いを持っています。でも、なかなかそれを実践出来ないでいる、だから、弱いというのです。また、私たちは様々な迫害や困難の中にあつても希望を持って生きることができる者たちです。私たちは天国に入れられるし、私たちには栄光のからだを与えられる、この希望を持って生きて行くことが可能なのです。しかし、残念ながら、私たちはその希望をいろいろな時に見失ってしまうのです。すぐに、周りのことに捉われてしまって、永遠についてなかなか考えることができなくなっています。皆さん、

そのようなことはありませんか？私たちはいろいろな苦しみを負って疲れ切っているとき、永遠のことなど考えていません。自分のこと、周りのこと、それだけでもういっぱいになってしまっていて、それ以上、それ以外のことを考えられない。そのようなことはあるでしょう？私たちは今も様々な問題や困難で苦しみ、そして、その苦しみが大きくなればなるほど、私たちは希望を失ってしまいます。だから、パウロが言うのです。「いろいろなことがあるけれども、私たちに必要なことは希望をしっかりと見据えて今を生きなければいけない。どんなことがあっても希望から目を逸らしてはならない。」と。逸らしてしまうと、今見たように、私たちはいろいろな重荷によって潰されそうになって行くのです。

私たちは信仰的にみな弱い者だと言います。見てください。26節「弱いあなたたち」とはパウロは言っていない。「弱い私たちを」とあります。なぜ、このように書いたのでしょうか？パウロ自身もそこに含まれているからです。パウロは自分も含めたのです。彼は「自分も弱い。あなたがただけが弱くて私は強いのではなく、実は、私も本当に信仰的に弱い者だ。」と言うのです。パウロは自分の弱さをよく知っていました。そのような信仰者でした。ですから、ローマ7：24にはパウロがそのことを嘆いていることばが記されています。私たちもパウロが自分の本当の姿をよく知っていたことに気付かされます。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と言っています。彼はからだが贖われること、新しい栄光のからだに変えられること、その希望を待ちながら罪と戦っていました。しかし、失敗に次ぐ失敗でした。そのことを彼は知って「本当に私はみじめだ、情けない。」と叫んだのです。

私たちはみな弱い者です。神を悲しませることの多い者です。信仰の成長において非常に遅い者です。私たちはこのような信仰の弱さを抱えた者なのです。

2. 祈りの弱さ

私たちはいろいろなことにおいて弱いということは私たち自身がよく分かっています。それでパウロはここで特に「祈り」を上げています。なぜ、パウロは「祈り」を特別に上げたのでしょうか？パウロのことばを聞くと、信仰者の弱さは祈りだけであるかのようにも受け取れます。皆さん、実は、この「祈り」がすべての核心だからです。パウロは当然、私たち信仰者が弱さで蔓延しきった者であることを知っています。同時に、パウロは「祈り」が信仰者にとって、主に喜ばれる歩みを為すための不可欠な力であることも知っているのです。パウロが敢えてこの「祈り」を取り上げたことは、私たち信仰者にとって最も大切な要の部分にもこのような弱さがあるからです。だから、私たちはすべての点で本当に弱いということと言わんとしているのです。個々の部分を上げなくても、私たちの一番大切な部分である「祈り」にもこのような弱さがある、だから、私たちは弱い者だということを彼らに悟らせようとするのです。

「弱い私たちを」と言います。彼は特に祈りに関してこのように言いました。「私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、」と。パウロは私たち信仰者が持っている弱さをここでこの様に具体的に上げました。「どのように祈ったらよいかわからない。」と。少し整理しておかなければいけません。この「どのように」ということばを聞くと、私たちはすぐに「祈り方」と思います。英語ではHOWに当たります。口語訳聖書では「どう祈ったらよいか」とあります。ですから、祈り方について分からないとパウロが言っているかのように思えるのですが、ここで使われているこの代名詞は「どのように」というよりも「何を」と訳すべきなのです。WHATと訳せる代名詞が使われているのです。

ですから、パウロがここで言いたかったことは、祈り方を教えて欲しいのではなくて、その祈りの内容に関することなのです。パウロはここで「言いたいことがあるけれども、それをどのように言えいいのか分からない。」とそのように言っているのではなくて、「何を言っているのか分からない。」と言っているのです。どういうことか説明を加えます。「自分は信仰的に弱い者であるために、神の前に何を祈ることが正しいのか分からない。」と、なぜ、そのように言うのでしょうか？「私は神のみこころが必ずしもすべて分かっている訳ではないから。」と、パウロはそう言いたいのです。神のみこころが何であるかが分かっていたら、神の前にいつも正しく祈ります。なぜなら、私たちの祈りはみこころを求めめるからです。

ジョン・マレーはこのような説明を加えます。「祈り方に対する無知さではなく正しい内容に関する無知さである。」。もちろん、私たちは何を祈るべきかを知っていることもあります。というのは、聖書が教えている命令、このように祈りなさいと言われていていることに関しては分かっています。例えば、お互いの霊的成長のために祈り合うということは教えられていることです。だから、そのことを祈ることはみな知っています。その様に祈ります。また、私たちは主に対して忠実であり続けましよう、これも神が命じていることですから、そのことも互いに祈り合っています。また、私たちは罪を告白することも命じられているので、そのことも分かっています。神を崇めることに関しても教えられているこ

とですから、私たちはそのようにするべきです。働き人を送ってくださいと祈りなさいと言われていたのですから、私たちはその様に祈ります。また、私たちは罪人が悔い改めて救いにあずかるようにと祈ります。つまり、聖書がこのように祈りなさいと言っていることは、私たちはよく分かっているのです。ですから、パウロはこれらのことも含めて、全部が分からないと言っているのではないのです。パウロが言っていることは、日常生活において直面する様々な状況において、たとえば、突然に困った状況に陥ったとき、予期せぬ出来事が起こったとき、私たちは何と祈ったらよいのか分からないのです。

パウロの例

Ⅱコリント 12章、パウロはこの12章の初めから、14年前に起こったある出来事を述べています。彼自身がルステラにおいて経験したことです。石打ちにあって人々はパウロは死んだと思いました。多分その時の出来事を記しているのでしょう。死んで、第三の天、つまり、神の臨在の元に引き上げられて、そして、その後再び地上に戻されたというそのことです。パウロ自身の経験です。7節「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。」、パウロにはこのようなことは最初から分かっていたわけではありません。もし、分かっていたならこのような祈りはしなかったでしょう。8節を見てください。「このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。」とあります。ですから、パウロはとげを得たときに、恐らく、これは何かの病気だろうと言われていますが、その病気を彼自身が自分の身に受けたときに、当然、彼が祈ったことは「神さま、この病気を癒やしてください。」だったはずですが、ところが、神の答えは「癒やしましょう」ではなかった、答えは「NO」です。パウロはまた祈ります。「神さま、どのように考えてもこの病が自分の身にすることは最善と思えない。」と。でも、神の答えは「NO」です。彼はまた祈ります。答えは変わらず「NO」です。

このパウロの状況を考えるときに、想像するとき、私たちもそのように祈るだろうし、また、パウロに対して「あなたは間違っている」などと言う人はだれもいないでしょう。なぜなら、このような「とげ」、病はないほうが良いことと思われるからです。私たちにとって障害と思われることはすべて、それらはないほうがよいと思いませんか？この障害が早く取り除かれたらすばらしいに違いないと、私たちはみなそのように思います。ですから、パウロもその様に祈った訳です。「神さま、どうかこの病を取り除いてください。」と。ひょっとすると彼は「病が癒されたならもっと主のために働きます」と祈ったかも知れませんが、そのような祈りをする人は今もたくさんいるでしょう。でも、パウロはこの祈りを通して大切なことを教えられたのです。それは、彼自身の祈りがみこころにかなっていなかったということです。あのように立派な信仰者であるパウロでも、主のみこころをいつも覚えてそれに従って行きたいと願っていたパウロでも、彼の祈りはみこころと違ったのです。そのことに気付かされるのです。障害と思ったことが実はそうではなくて、自分にとっての祝福であるということが分かっているのです。ですから、彼の祈りは変わったのです。彼はその「とげ」を感謝するのです。

12:5を見ると、「このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。」とあります。9節には「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」とあり、10節にも「ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」とあります。パウロは「弱さ」を誇り始めるのです。「神さま、感謝します。これが与えられたことによって、私は常にあなたの前にへりくだって砕かれて生きることがができます。」と。もし、この「とげ」がなければ、彼は大いに高ぶった高慢な者となっていたはずですが。

パウロはちゃんと分かっているのです。「最初はありがたくなかったけれども、私に何が必要かを ご存じであるすばらしい神は、このとげを私に与えてくださった、だから感謝します。」と。パウロでさえもみこころとは違う自分の願いを祈ったのです。それほど弱い者だということです。

モーセの例

旧約聖書の代表であるモーセも面白いことをしています。申命記3章には、モーセが神の前に懇願している様子が記されています。モーセとイスラエルの民はこれから新しい地に入っていくのですが、申命記3:25-26を見ると「どうか、私に、渡って行って、ヨルダンの向こうにある良い地、あの良い山地、およびレバノンを見させてください。:26 しかし主は、あなたがたのために私を怒り、私の願いを聞き入れてくださらなかった。そして主は私に言われた。「もう十分だ。このことについては、もう二度とわたしに言うてはならない。」とあります。モーセが願ったことは、あの約束の地カナンに入ることです。そのことを彼は主の前に懇願するのです。でも、主のお答えはどうでしたか？「分かった」ではなくNOです。

聞き入れない、それはみこころではないと言うのです。

つまり、皆さん、もう一度私たちはこの「祈り」について神のみこころを求めることの大切さを学ぶことが必要なのです。みこころを求めることの大切さです。なぜなら、皆さんはもうご存じです、みこころが最善だからです。でも確かに、そのことは何度も耳にするのですが、なかなか飲み込むことができないのです。どうしても自分の考えることの方が最善であると思えて仕方ないのです。なぜなら、病気が治ることはだれが考えても最善のことと思えるからです。しかし、実際には、すべての病が癒やされる訳ではありません。病になることがみこころである、召されることがみこころであったりするので。そうすると、悲しいことに、「愛の神さまってどうなったの？ どうして？」と私たちは思ってしまうのです。また、ある人は、人と同じように幸せになることが最善であると思うのです。なぜなら、私たちの周りの人たちを見ると、主イエスを信じていなくても幸せそうな家庭はたくさんあると思えるし、満足して喜んでいると見受けられる人は大ぜいいるように見えるのです。そうすると、このような思いが出て来ます。「そんなにみこころにこだわらなくても良いのではないか？ みこころが本当に最善であると言われ、そのように聞いてはいるけれど、そうとは言い切れないのではないか？ みこころ以外のところにも幸せや満足があるのではないか？」と。

イエスを知らない人たちと同じように、結婚して家庭を持ちさえすれば幸せになるのではないか？ そんな神のみこころなんて考えなくても良いのではないか？ なぜなら、周りの人々は幸せそうだから…と。そのようにサタンは私たちをだまし続けるのです。その様な偽りの惑わしにだまされてはならないのです。なぜなら、皆さん、サタンはあなたに最善のものを与えたくないのです。あなたが永遠のいのちを受けることも望んでいないし、あなたが地上にいて本当に主の祝福をいただいて生きることも望んでいません。だから、神の最善よりも他のものを得ようとあなたを誘惑するのです。なぜなら、もしあなたが最善のものを得るならサタンにとっては困るからです。あなたが主のみこころは最善であるというその証し人になってしまうからです。

だから、信仰者の皆さん、あなたへの誘惑が何であろうと、しっかりと立たなければいけないのは、主のみこころだけが私たちにとって最善であるという、この聖書のしっかりとした教えです。みこころ以外にあなたが心から満足し、喜びに溢れることはあり得ないのです。もしこの地上において幸せを願うのなら、幸せに過ごしたいと願うのなら、選択肢はありません。みこころに従って行くことだけです。なぜなら、天に上がって主にお会いしたときに主から喜んでいただくことは、この地上において、主のみこころに忠実だったことです。あなたが主の前に立った時に「良くやった」と言っていただけなのは、あなたが地上において主のみこころに忠実に従い続けて来たからです。その様に歩む者たちを主は天において豊かに祝してくださるし、そのような者を地上において主は豊かに用い祝してくださるのです。もし、私たち一人ひとりが主のみこころに忠実に従って行くなら、確実なことは、あなたを通して主の栄光が現わされて、霊的に暗やみのこの世界にあって、キリストこそが真の救いであり、この方こそが希望であることを明らかに示して行くのです。だから、私たち信仰者は主が教えてくれているようにみこころを祈り求めて行くのです。なぜなら、このことが私たちにとって最善だからです。主が備えてくれたのです。

私たちはこの「祈り」を考えるときに、何でも祈っていい、何を言ってもいいとその様に思っている人たちがたくさんいます。しかし、覚えなければいけないことは、私たちは主のみこころに沿って祈ることが必要なのです。神が望んでおられること、それを私たちは求めて行くのです。でも、そのためには神が何を望んでおられるのかということを知らなければいけません。しかし、悲しいことに、それは私たちには不可能なのです。私たちは非常に弱い者だからです。そこで、神は私たちのこの弱さを知った上で、助け主を送ってくださったのです。それが26節から記されています。

B. 聖霊の働き 26-27節

私たち信仰者の弱さを語ったパウロ。主に喜ばれたい、みこころ従って行きたいという願いをもって私たちがですが、悲しいことに、私たちはこの状況で何が正しいことか、何が神に喜ばれることなのかを考えて一生懸命やっても、そのすべてに間違いがないとは言えません。多くの間違いがあるのです。しかし、そのように弱い私たちが神は助けてくださいと、そのことを26節から27節に記しています。まず、ここには「聖霊の働き」が記されていますが、二つのことがあります。一つは「助け主」であり、もう一つは「とりなし」です。

1. 助け主

26節に「御霊も同じようにして、弱い私たちが助けられます。」とありますが、この「助ける」ということばは「手伝う、だれかを助けるために来た」という意味です。聖霊なる神は私たち信仰者を助けるために来てくれたのです。あなたが神に喜ばれる歩みを為して行くために、助けが必要だから、そ

の助けを与えるために来てくれたと言うのです。思い出されませんか？ヨハネの福音書14章でイエスが語られたこと、16-17にこのように記されています。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。:17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」、聖霊なる神が送られる、聖霊なる神があなたを助けてくれるとイエスが約束されました。そして、約束通り聖霊が来てくださり、聖霊が私たちに内住してくれているのです。そして、その聖霊なる神が私たちを助けてくれるのです。

2. とりなし

何において助けてくれるのですか？私たちの祈りにおいてです。とりなしです。26節に続いて「私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」とあります。

(1) 「言いようもない深いうめきによって」

聖霊なる神が何か得体の知れないことばによって私たちのためにとりなしの祈りをささげてくださいと、ある人たちはここから異言によってお祈りをするというような結論を引き出します。しかし、ここではそのようなことは教えられていません。聖霊が声を上げて祈るなどそのようなことは教えられていないのです。ここで言われていることは、聖霊なる神が私たちの心とともに働かれるということです。みこころを行なって行きたいという願いを持っている私たち信仰者、その心とともに聖霊が働くと言うのです。今、話したように、聖霊が声を上げて訳の分からないことばで祈るということは、聖書の教えではないということ、ここに「言いようもない」と書かれていることを見てください。この形容詞の意味は「ことばで言い表すことのできない、語ることなし、声に出すことが全くない」です。

ですから、このことばからも、何か声に出して言うことではないことは明らかです。ですから、何か異言をもって語るということではありません。また、聖霊が声を出してお祈りをするということでもないのです。しかも、聖霊がうめき声を上げていると記されているみことばはどこにもないのです。パウロがここで言いたかったことは、最初に話したように、みこころを行なって行きたい、みこころに従って行きたいという私たちの心とともに、聖霊なる神が働いてくださるということです。そのような願いを持っている私たちに聖霊なる神は力づけてくださる、サポートしてくださるのです。このように私たちの心に聖霊が働くということは、ローマ8:15-16にありました。「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。:16 私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてください。」、もうすでに私たちはこのことを学びました。聖霊の働きのことです。私たちが神と非常に親しい関係におかれているということ、内住する聖霊が私たちの心とともに悟らせてくれるということです。そのような確信を内住する聖霊が私たちに明らかにするのです。だから、私たちの霊とともに内住する聖霊が働かれてその確信をもたらしてくれるのです。

ですから、26節でパウロが言わんとしていることは、私たちの内にいる聖霊が、私たちが本当に主のみこころに従って行きたいという心からの願いによって、不完全な私たちでも、その私たちの内側からそのように歩み続けて行くようにと励ましを与えてくれる、そのように祈ってくれるということです。

(2) 「神のみこころに従って」

27節を見てください。パウロはここで聖霊と人間とを比較します。面白い比較です。「人間の心を探り窮める方は、」、人間の心を調査するという意味があります。つまり、私たちの心の中にあるものを知っておられる神、もちろん、この「人間の心を探り窮める方は、」とは父なる神を指していますが、その父なる神は私たちの心のことをすべて知っておられる。同時に、御霊の思いも知っていると言うのです。神なのですから当然のことです。でも、敢えてこのような表現を使っているのは、人間と聖霊なる神とを対比するためです。その後を見てください。「御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」、つまり、神のみこころに従って聖霊はすべてのことをしようとする、それが聖霊だと言うのです。

私たち人間は、そのような願いを持っていながら、常にみこころに従って歩んで行くことができない者です。でも、聖霊はすべてにおいて父なる神のみこころ通りに為さっているのです。この二つを比較することによって、常に神のみこころに従って行くことしかできない聖霊が、あなたのために祈ってくださっていると言うのです。ですから、私たちがみこころが何か分からなくて祈っているとき、私たちの内にいる聖霊はみこころが成るようにと祈ってくださるのです。聖霊はそのような働きを私たちの内に為してくださるのです。

では、そうなら、失敗ばかりする私たちは祈らなくても良いのではないか？と思われませんか？でも、それは違うのです。「祈り」は私たちクリスチャンに与えられたすばらしい特権だからです。私たちは全能なる神と個人的に交わることができるのですから。「私は祈りなんて必要としません。この一週間祈っていません。」と、もしこのように言う方がいるなら、確実なことは、あなたの信仰は弱っています。私たちはこんなにすばらしい特権をいただいたのです。この世界の造り主と個人的に交わることができるのです。その方はあなたのことを覚えてあなたの声を聞いてくださるのです。

そして、私たちがどのように祈ったらよいのか分からないという、そのような状況が多くあっても、私たちの内にいる聖霊がみこころが成りますようにと、その状況において、父なる神の前にあなたに代って祈ってくれる、だから、みこころが成されて行くのです。しかし、そのみこころは私たちの願っていたことと違うということを経験しますが、そのときに私たちは何を学ぶのでしょうか？これまで見て来たように、パウロが学んだように「主の為さることは最善です。あなたのみこころは本当に最善です。」と学ぶのです。このようなことを通して、私たちは更にみこころに対して従順にあり続けようとするのです。

非常に興味深い表現を使いながら、パウロは私たちにすばらしい希望をくれました。すごいこと！と思いませんか？主のみこころに従って行きたいと願っている信仰者の皆さん、そのように願うのはあなたが救われているからです。自分の思い通りに生きて行こう、それは救われていないときの私たちです。救われた私たちは主に従って行こうとします。しかし、現実はその状況、状況でどのように祈ったらいいのか分からない、それほど弱い存在である私たちです。でも、神は私たちの願いを知っておられます。もう一つ付け加えるなら、主のみこころに従って行きたいという願いは、神があなたの内に与えてくれたものです。救われているからそのような新しい思い、かつてはもっていなかった思いをもって生きて行く者となったのです。その思いを持って生きているあなたのために聖霊はちゃんと祈ってくれて、あなたがしっかりみこころに沿って歩んで行けるようにと、大きな助けがここに与えられているのです。

適用：そうすると皆さん、私たちが覚えなければいけないことは、私たちはしっかりとみこころを探り求めることが大切なのです。みこころを知ることが大切なのです。しかし同時に、みこころに従って行くことも大切なのです。というのは、パウロが何度も教えてくれているように、いろいろな問題の中にあって私たちがすぐにしてしまうことは、神の約束から目を外してしまっ、周りに起こっていることに目を留めてしまうことです。だから、希望がなくなるのです。だから、私たち信仰者は、どんなときにも神のみことばにしっかりと立って流されないようにしなければいけないのです。どのような困難な状況に陥ったとしても、様々な問題があなたから希望を奪って行くようになったとしても、あなたはしっかりとその希望を見ていなさい、希望を見据えていなさいと、パウロは教えるのです。

あなたにはすばらしい永遠が約束されている、そして、もう暫くすると、あなたはその罪のからだから解放される、栄光のからだをいただいてこの主を永遠にそのみ顔を拝して崇め続けて行くことが出来ると言います。このような祝福をいただいていることをしっかりと覚えて今日を生きて行くことです。ただ、みこころを聞くだけでない、その様に歩んで行きなさいと言うのです。希望を失っている人はいませんか？今日生かされていることを喜べない人はいませんか？もう人生が辛くて、イエスを信じているけれども辛くて、早く神が私を召してくださるようにと、クリスチャンとしてその人生に絶望している人はこの中におられませんか？答えがあります、皆さん。あなたは見ている所を間違っているのです。あなたはこのすばらしい希望をくださった主を見ていないのです。あなたにはどのような約束が与えられているのか、そこを忘れてしまっているのです。

パウロが私たちに教えることは、そこを見なさい、そして、いろいろな問題に負けてしまうのではなく、主を信頼して、主が望んでおられることを主の助けをいただきながらやっ行って行きなさい、聖霊はあなたを助けるためにいてくれるのだから、聖霊はあなたのために祈ってくれているのだから、だから、歩み続けて行きなさいということです。

最初に紹介した讚美歌の折り返しの部分はこのように続きます。「私の愛するキリストが間もなく来られる。朝かも昼かも夜かも知れない。わたしの灯火にわたしは火を付けた、目を覚まして祈ります。それは今日かも知れない。それは今日かも知れない。」と。このように信仰者は主にお会いする日は今日かも知れないと、そのことをしっかりと覚えて主に従い続けたのです。

皆さん、この約束は実現します。主はあなたや私を迎えに来てくださる。その日を待ち望みながら、今日という日を生きることです。主を見上げるときに主が希望をくださる、なぜなら、主が私たちの希望だからです。